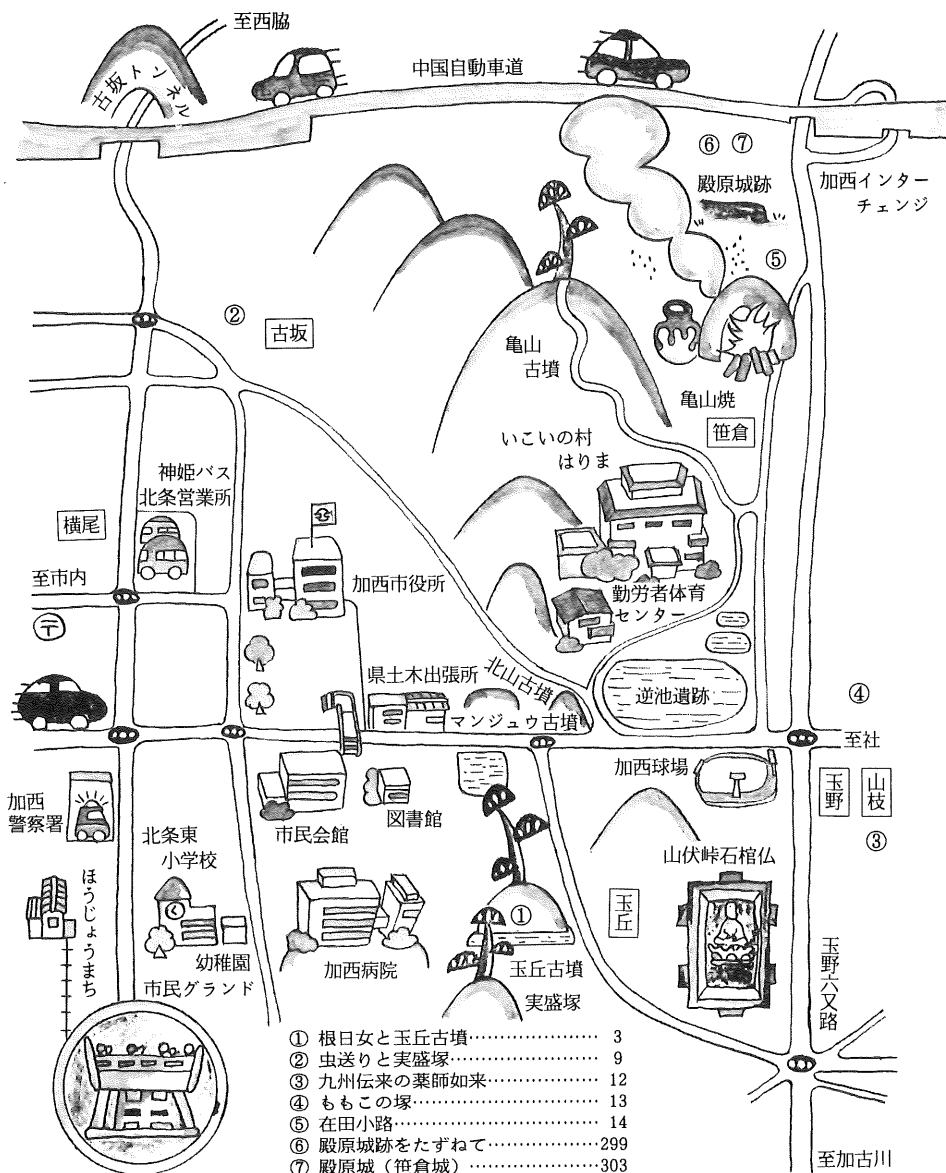


1 根日女の里をめぐる 6.5キロメートル



・玉丘古墳（国指定史跡）

長さ一〇五メートル、後円部の直径六四メートル、高さ九メートルもあり、周囲に幅二〇メートルの水溜をめぐらせた、規模や形状の美しさから、県下では五色塚古墳（神戸市垂水区）に並ぶ前方後円墳です。

玉丘古墳群の中心をなしていて、五、六世紀頃この地方に勢力をふるっていた針間鴨国造の根拠地であったことを示しています。

・亀山古墳（市指定文化財）

墳丘の径二〇メートルの山頂古墳です。昭和一二年の調査で、眉びさし付かぶとなど副葬品が出土して全国的に知られるようになりました。

玉丘古墳より古く、古墳時代前期（四世紀頃）のものです。

・北山古墳

玉丘古墳、亀山古墳のほぼ中間に位置しています。発掘調査によって、高度な築成土木技術がうかがえた玉丘古墳群の中の貴重な古墳です。

・逆池遺跡

亀山麓に位置し、後期石器時代（数万年前）から縄文時

代後期（四〇〇〇年以上前）にわたる間の石器が多数出土します。

今から三万年も前に私たちの祖先が、ここ加西の地に住みついて狩猟生活をしていたことがうかがえます。

・マンジュウ古墳

帆立貝式前方後円墳で、築成当時は一〇～二〇メートルの周濠をめぐらせた堂々たる古墳であったようです。人物埴輪の破片など多数出土しています。

・亀山焼

明治時代の中期に笹倉城主の子孫、長浜常三郎という人が郷土の殖産をはかるために多紀郡今田村立杭から陶工を雇い入れて焼物を初めたのが最初です。登り窯による丹波焼そのままの技法と播磨の陶土を調和させ、松灰の灰被りによって生じた渋みのある独特のやきものが注目されつつあります。

根日女と玉丘古墳（玉丘町）

玉丘の古墳は、みなさんもよくご存じのように、ずいぶん大きな古墳で、県下でも屈指の前方後円墳でございませう。

樹木におおわれた墳丘が水をたたえたまわりの堀に姿を映すさまは、まことに水塚と呼ばれるにふさわしいものでございます。

この古墳が造られた当時は、全体を白い玉石で飾り、それはそれほごとな姿だったそうでございます。それで、みんなはこの古墳を、玉の丘と呼び、この村を玉野と名づけたということでございます。

いい伝えによりますと、この美しく壮大な玉塚は、この地の豪族針間鴨国造（国の首長）許麻の娘、根日女を葬った塚なのだそうです。でございます。その頃、三木の志染に住んでおられた意美皇子、袁美皇子と呼ばれる兄弟の皇子さまが、同時に根日女をみそめられたのでございますが、ご兄弟がおたがいによずりあいされているあいだに、



根日女は、はかなくもこの世を去ってしまったのでございます。二人の皇子は、この根日女の死を大へんに哀かなしまれて、朝日夕日にかげらない、この絶好の地を選んで墓を造らせ、玉石で美しく飾らせたと申します。

それでは、みなさんに今から、意美皇子、袁美皇子と根日女の出合いについてお話ししたいと思います。

それはそれは大昔、そう、今から千数百年も前のことになるのでございますが、その頃、大和の朝廷では皇位をめぐって争いごとが続いていたのでございます。

安康天皇あんこうの弟君大長おとうとぎみ谷皇子やみこ（後の雄略天皇）は、競争相手の履中天皇の皇子、市辺押盤皇子いちべおしばんを狩にさそい出し、近江の国（今の滋賀県）で殺してしまわれたのでございます。そこで市辺押盤皇子のお子、意美、袁美の二皇子は日下部連意美くさかべのむらじおみという者に連つれられて、三木、志染しじみの石室いしむろに逃れて来られたと申します。

しかし、あまりのことの重大さに恐れをいだいた意美は、馬具をはずし、手綱たづなを切つて、乗ってきた馬をどこかへ放つてしまい、持ち物すべてを焼きすて、自分は首をつつて死んでしまったのでございます。意美、袁美の二皇子は、石室にかくれ、身をひそめておられました。行くあてはもうろん、知る人となくとほうにくれてしまわれ、あちらこちらとお迷いになったすえ、志染の村の長おさ、伊等尾いとみという者の家に下男としてつかわれることにお決めになりました。

お二人は、皇子であることは一言も口やそぶりに出されず、丹波の国の者であるといつわつて、なれない仕事に精を出されたのでございます。

それから何年からの年月がたって、志染の長、伊等尾は、家を新築したのでございます。方々の国から造^{くにのまやつこ}たちが、いろいろなお祝いを持ってやって来ました。針間の国の大和朝廷の御領地からも、山部連少楯^{やまべのむらじおたて}というものがお祝いにやって来て、その夜は伊等尾の家に泊ることになったのでございます。祝宴が開かれるということをお聞きになった袁^{をけのみこ}奚皇子は、兄意^{おけのみこ}奚皇子に

「もうここへ来てから、ずい分長くなります。名をなのって身分をあかすのは、今宵より他にはないでしょう」と、言われたのです。しかし意奚皇子は、

「私たちは、なるほど履中天皇の孫にあたる身ではあるけれど、こうして、牛や馬を飼う下男としてくらしている。つらさは私とて同じだが、今名をあらわせば必ず殺されてしまうにちがいない」

と、反対されました。袁奚皇子が

「一生こんな生活で終るのなら、むしろ名をなのり殺された方がしあわせです」と言われたので、兄弟はだきあって涙を流されたのでございます。

やがて宴はたけなわとなって来ました。興にのった伊等尾は庭先で明かりをとるためのかがり火の世話をしていた二皇子に舞を舞うことを命じました。そこで、乞われるままに袁奚皇子は、新築祝いの歌をうたい、その歌にあわせて舞いました。

ところが、その舞いが余りにも上手で、優雅でしたので、これを見た少楯は「これはただの下男ではない

ぞ」と感づいたのでございます。

「あなたたちは、何者なのですか」という少楯の問いに、袁奚皇子は、

淡海は おおもみ 水たまる国

やまとは 青垣

(註) 滋賀は 琵琶湖のある水の国

大和は 青垣のように山に囲まれた国

その大和の宮においてになった

青垣の いちべ すめらみこと やまとにましし
市辺の 天皇が すえ みあな末

市辺の天皇の子孫です

やっこ 奴僕らま

下僕の我らは

と、おうたいになりました。

少楯や伊等尾はもちろん、その場にいわせた者たちはみんなびっくりして、席を離れひれふしました。少楯たちは、さっそく仮宮殿をつくって、二皇子をお迎えしたのでございます。

このようにいきさつで意奚、袁奚のご兄弟は、皇子として、三木の志染の地でおくらしになることになったのでございます。

この頃、今の加西市の玉丘あたりを中心に、針間鴨国がたいへんに栄えていたのでございます。山あいには広がる肥沃な盆地は耕地として適していましたし、何といっても、この場所は東西をつなぐ交通の要所でありました。大和から宝塚、三木を通過して福崎・山崎・美作への重要な通行路だったのでございます。

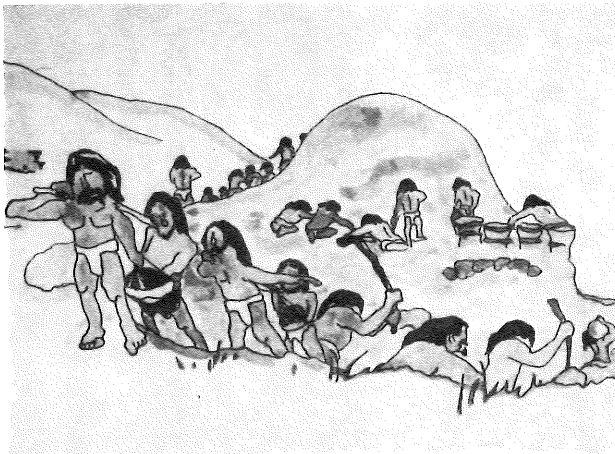
この鴨国造^{こま}許麻^{こま}の娘に、根日女^{ねひめ}というそれは美しい乙女^{おとめ}がいたのでございます。意^い奚^き、袁^{えん}奚^きの二皇子が、狩のためこの鴨国におこしになった時のことでございます。根日女にお出合いになった二皇子は、たちまちその美しさに心をうばわれてしまわれたのでございます。早速、少楯^{すくぬぎ}をつかいとして鴨国につかわし、「是非、根日女を后^{きさき}として迎えたい」と伝えられました。

「喜んでお受けいたします」

許麻はもちろん、根日女にとっても、異論のあろうはずはございません。鴨国の人々は、このすばらしい縁組みをみんなで喜びあいしました。

ところが、困ったことに、ご兄弟お二人がともに気に入られたものですから、どちらの皇子が根日女をお后^{きさき}に迎えられるのか、なかなか決まらないのでございます。仲のよいご兄弟は、おたがいに譲りあわれて、いたずらに月日が流れて行きました。

一方、大和朝廷では、雄略天皇の後、清寧天皇が位につかれたのでございますが、この清寧天皇には御子^{みこ}がなかったものですから、



意奚、袁奚両皇子の叔母にあたられる忍海郎女おめみのいらめが、政治をとられることになったのでございます。

少楯から意奚、袁奚の両皇子が、無事志染でくらししておられることをお聞きになった忍海郎女は、たいそうよろこびになって、早速、両皇子を大和へ迎えられることになったのでございます。

こうして意奚、袁奚の両皇子は、根日女との約束だけを残したまま、大和へと去ってしまわれたのです。どんなにか気落ちしたことでしょう。

そして、長い月日がたち、根日女は年老いて亡くなってしまいました。

二皇子は、これを聞かれてたいそうお嘆きになりました。根日女をあわれんで、この玉塚をお築きになり、手厚く葬られたことは、最初にお話したとおりでございます。

千数百年という長い年月がたった今も、この玉塚を仰いで見るごとに、悲しい根日女の恋がついこのあいだのように忍ばれてくるのでございます。

最後に、大和朝廷では、袁奚皇子が先に位につかれ、顕宗天皇となられた後、兄の意奚皇子も仁賢天皇となられたことをいいそえておきます。

虫送りと実盛塚さねもりづか（北条町古坂）

「サーネモリサーンノゴジョーラクー、イーネノムーシーオートモセー」

「実盛さんの御上落、稲の虫お供せい」

大声で叫びながら、竹ざおの先につけた実盛さんの人形をふりかざした者もんを先頭に、村中の者が手に手に松明たいまつをもって稲の虫を送っていくんや。虫送りいうてなあ。

田植がすんでからの村の大きな行事の一つやった。

昔は、今のように農薬いう便利なもんはなかったんやから、イネに虫がつくことはそりゃ、おとろしかった。虫のおかげで、イネが全滅することも度々あったんや。昔の人が、苦心のすえ考えついた方法やったにちがいない。

ここらではどこの村でも、ほとんどの村で虫送りの行事をやっていたが、その村で「虫送りの日」がふられると、みんなは日の暮るのを待って、決められた場所へ集まってくるんや。たいがいはその村の一番上かみの村境が多かったが、お宮や公会堂のところもあった。そこで豊作をお祈りしてから、みんなが持って来た松明たいまつに火をつける。松明に火がつくと、馬に乗った実盛さんのわら人形を先頭にして、鉦かねや太鼓を力いっぱい打ち鳴らし、法螺貝ほらがいを吹いて、村の下手しもてへ下手へと下って行くんや。松明の火が田の水に映って、そりゃ

きれいやった。

その実盛さんというのはな。何でも、源平合戦で木曾義仲が平家を北陸に攻めた時や、源氏の方の大將やった齊藤別当実盛が、平家方の手塚太郎光盛と馬上で組みうちしたんやが、運悪く実盛の乗った馬が稲株にまずいてしもうたんや。実盛は体勢の崩れたところを光盛に刺されて、無念の討死をしまったということや。それで実盛は、その稲株を恨んで「稲の害虫になって、日本国中のイネを喰い荒してやる」といいのこしたそうなんや。それで、虫送りの時に実盛さんの人形を先頭にたてて、

「実盛さんの御上落、稲の虫お供せい」

と唱えるようになったということや。

この呼び声も、村によっていろいろあって、そのわけもわからなんだもんやから、

「サーネノモリーハ、ゴージョーラク、イーネノムーシャ、オートモセー」

いうたり、

「イーネノムーシャ、オートモセー、サーネモリサンハー、ゴージャラコー」

と叫んだりしたんやな。

行列が村を下って自分の田に近づくと、列から離れて「オートモセー」、「オートモセー」いうて松明をふりながら、自分の家の田のぐるりをまわっては列に帰ってくるんや。みんなは、実盛さんの人形の進んで行

く後を追って村はずれの野原や池のそばに集まると、そこで人形といっしょに燃え残りの松明を焼き捨てたもんや。火が大きながり火になって、みんなの顔を明々と照らし出したのをおぼえとるがな。どの顔もみんなにこにこ笑うとったようやった。

古坂では、村はずれにある実盛塚へ虫を送っていつて、この塚で焼き捨てる習わしやった。この塚は何でも、その斉藤実盛がここへ逃げて来て死んだのを祀った塚やいうて伝わるとるが、ふだんはこの塚へ近づくと、必ず熱が出て頭が痛くなるというんで、誰もよう近づかんのや。

まあ今から考えたら、おかしい行事やったとも思うがな。だが虫は火に集まる習性^{ならわし}もつとるし、大声を上げて鉦や太鼓でびっくりさせて飛び出させ、松明の火に集めて焼き殺すいうのは、理屈にあっているようにも思うがな。その頃はイネつくり^{いねつくり}に欠かせん大事な行事や思つとったし、楽しみやった気もする。とにかく、昔の人たちの豊作を願う純な気持から出た行事やったことだけは、まちがいないな。

（小池津義男、清水増太郎、今峰虎夫、西脇誠一氏他の話より）

九州伝来の薬師如来（山枝町）

山枝町東南の一隅にある薬師堂は、本尊に高さ一メートル三十センチ余りの立派な薬師如来やくしにょらいの座像が祀られている。この本尊の薬師如来像は、今を去ること数百年の昔、はるばる九州より伝わって来たものだという。

この仏像を安置していたのは、九州の筑紫山安東寺つくしさんあんとうじというお寺だったのだが、不幸にして火災にあい、焼けてしまった。しかし本尊の薬師如来像だけは火中にあっても大した損傷も受けず取り出されたという。ただ惜しいことに、左肩に火傷やけどを負っておられたので、人々は協議のすえ京都に上って仏師に修繕を頼むことにした。

仏像をかついで京へ上る途中、山枝のこの場所までやって来たが、旅のつかれか病気が出て、仏像を残したまま死んでしまった。そこで、里人たちはこの人を手あつく葬り、薬師如来像は堂に安置して、その名も同じ筑紫山安東寺と名づけた。

それ以来、その人の命日の四月十二日には僧を呼んで法要を営み、二十一年毎に本尊開帳の大祭典をする



ことになっている。当日は村々から山車^{だんじり}も出て大変なにぎわいをみせている。

(山田源四郎氏の話より)

ももこの塚 (山枝町・別府町など)

山枝町と別府町、それに常吉と朝妻町の一部を占める高い台地を、「ももこ野」と呼んでいます。今でこそたくさんの方が建ち並びましたが、五十年前前には家はほとんどなく、松林が一面に続いていました。ここが「ももこ野」と呼ばれるわけは、山枝町野の垣内^{かち}、県道のすぐ北側の高台の頂上付近に「ももこの塚」と呼ばれる直径六・七メートルほどの円墳があるためです。

いつの頃でしょうか。玉野町の市場橋と宗寿寺の間あたりに大きな屋敷をかまえた豪族が住んでいたといえます。この豪族には「ももこ」という娘がありました。娘は「わたしが死んだら、わたしのお母さまと同じようにこの屋敷と玉野の村が一目で見渡せる所にうずめて下さい」といい残して、なくなったのだそうです。それで、母親の墓は西の方から玉野が見下せる天満神社のそばに、娘ももこの墓は東から村が見下せる山枝にそれぞれ造られたのだということです。

(西川実旺氏の話より)

在田小路（笹倉町）

昔、在田村上野の石部神社の神様が玉丘町から山裾を通られ、笹倉の西の垣^{かち}内をお通りになりました。

そのころ西組の戸数は七軒程でしたが、道ばたの一軒の小さな家から、おばあさんの糸をつむぐピーン・ピーンという音がきこえてきました。神様は、その家へよられて水を一ぱい飲ませてほしいと言われました。おばあさんは、井戸へ神様を案内し水をさしあげられました。

その井戸は、今でも石部神社の三つ井戸と呼ばれ、まわりを玉垣で囲み残っています。

それから後、笹倉では道より西は上野の石部神社の郷となり、道より東は日吉神社の郷となったといわれています。

その後、石部神社の祭礼には西組は殿原の人たちと一緒に神輿をかつぐことになり、殿原の人達から笹倉の在田小路の者やと言われていました。

（甘中保治氏の話より）

